代表者授業(5/18)

第３学年　社会科学習指導案【当日修正版】[redacted]

【授　業】13：30～14：20 会場 ３年１組　（４階）
【協議会】16：30～17：20 会場 第１研修室（１階）

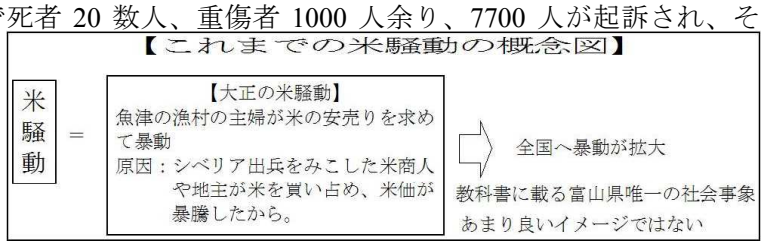
１　**単元名**　　高まるデモクラシーの意識 ―米騒動を通して―

２　**単元について**

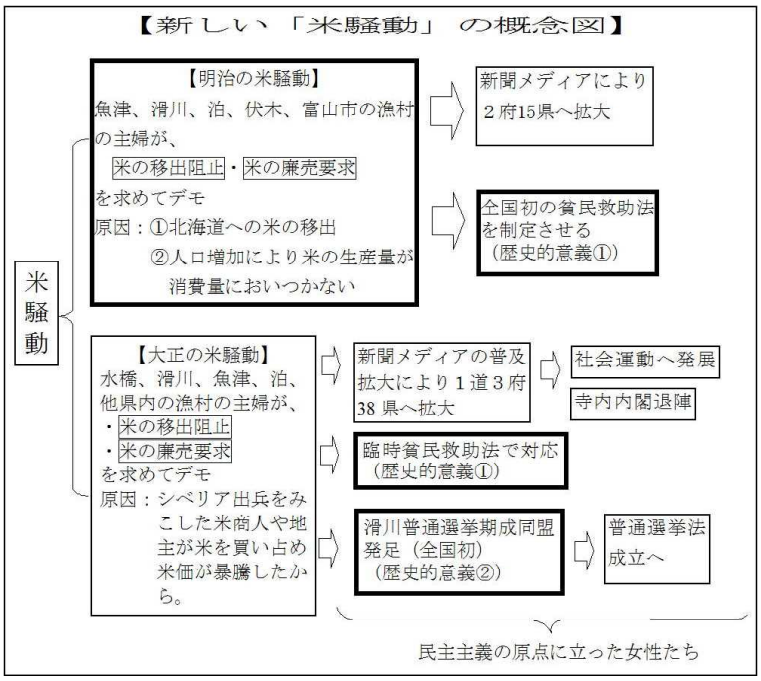
（１）**単元設定の趣旨**

この単元は、平成29年版中学校学習指導要領の歴史的分野大項目Ｃ(1)(ｵ)「我が国の国民の政治的自覚の高まり（筆者省略）を基に、第一次世界大戦前後の国際情勢及び我が国の動き（筆者省略）を理解する」ことをねらいとしている。その際、「大正デモクラシーの時期の社会運動の展開を取り扱うようにし、米騒動をはじめ、労働運動、農民運動、社会主義運動などの社会運動が幅広く行われるようになったこと」に気付くことができるようにする。

今年は、日本の近代の出発点になった明治維新から 150 年になる。そして、1918（大正 7）年に富山湾東部沿岸地域に端を発した「大正の米騒動」から 100 年になる。この「大正の米騒動」は、瞬く間に全国に波及し、1 道 3 府 38 県で数 10 万人が騒動に加わるという、歴史上例を見ない民衆蜂起となった。この「大正の米騒動」は、「越中の女一揆」として知られるが、米の暴騰に苦しむ「おかか（女房）」たちが、まさに生きるために立ち上がり生活を守るための必死の戦いであった。そこには、騒動を主導するリーダーがいたわけでもない、いわば自然発生的に声をかけあいながら、米の県外移出阻止に動いた、ささやかな直接行動（デモ）であった。しかし、このささやかな水橋・滑川・魚津・泊を中心とする直接行動が、ジャーナリズムを動かし、全国の大都市、鉱山などを巻き込み、ついに暴動にまで発展した。政府は、120 地点に、のべ 9 万 2000 人もの軍隊を出動させ、民衆の鎮圧にあたったが、全国で死者 20 数人、重傷者 1000 人余り、7700 人が起訴され、そして死刑 2 人という痛ましい結果を残した。この「大正の米騒動」は、教科書に載る富山県唯一の歴史的事象である。人によっては、県民として恥ずかしい歴史的事象として捉えているのも事実である。ここまで、「大正の米騒動」の概観を述べたが、これらは個別的常識的知識であり多くの人の認識である。ここで、これまでの研究成果により米騒動の因果関係、意義を整理していきたい。



米騒動は、1918（大正 7）年に始まる「大正の米騒動」だけではない。実は、明治維新から規模こそは異なるが、富山県では、ほぼ毎年のように米騒動は発生しており、「明治の米騒動」が存在した。明治期に富山県で米騒動が起こった原因は、おもに２つである。１つ目は、都市へ人口が集中し始め、米の需要を急速に高めていたことが挙げられる。つまり米の収穫高が年々増加している一方で、米の消費総額も増えており、米の需給不均衡が生じていた。２つ目は、北海道への米の移出が原因である。北海道の人口は、屯田兵・開拓農民・出稼ぎ移住などにより増加していったが、米の生産量がその人口増加に追いつかず、米を道外からの移入に頼っていた。その米を移出したのが東北や北陸であった。とりわけ富山県が全移入米の 60 ～ 70 %を占めていた。明治年間の米の収穫高は、第 1 位が新潟県で、第 2 位が富山県、第 3 位が



福岡県であった。富山県では、今でも水田率1位の米単作地帯であるが、当時から穀倉地帯であるがゆえに、米の県外移出および政府の強制買い上げ米が相対的に多かった。また、それらの米は、おもに北前船による海上ルートも整っていた滑川、魚津、岩瀬、伏木などの港から移出されていた。米が値上がりしても、都市労働者は賃金が上がるが、米を買って暮らす漁村の人たちには最も影響があり、その港町から米騒動が発生するのは当然であったといえる。このことから、米騒動は米の安売りを求めただけではなく、「米の県外移出阻止」も求めていた。

次に、米騒動の影響についてである。「明治の米騒動」では、1889（明治 22）年に「貧民救助規定」、「貧民救助方法」を旧魚津町が議決し、米の廉売を行ったり、救助米を施したりした。類似の制度を大阪府が1890年10月に制定している。しかし、魚津の制度は、大阪よりも早く制度化し、かつ救助の対象が広く、全国に先駆けたものである。そして、「大正の米騒動」でも「臨時貧民救助規定」を制定し、救済策を講じていたので、全国の騒動とは違い、暴力に及ばず、唯の一俵たりとも略奪したという記録がない。全国に先駆けて「生存権」である「生活保護」という基本的人権を尊重した政策を施していたことに歴史的な意義がある。

また、「大正の米騒動」は、普通選挙運動の高まりを一気に促した。旧滑川町では、富山県下最大の米騒動となり、米騒動が全国的に拡大する契機となった端緒の地である。この旧滑川で普通選挙期成同盟が結成された。この同盟には、町議会議員、工場主、商店主、有識者、中産階級の若手ら160名が参加した。この同盟は、普通選挙実現に向けて帝国議会貴族院、衆議院へ請願することをなどを決議したと同時に、滑川普通選挙期成同盟会宣言書を発表した。その中に、「先頃の米騒動は無意識の普選要求だとし、騒動までに普通選挙が実施されておれば、米騒動は起きなかったであろう」と、述べている。この動きは、松山、仙台、静岡、名古屋、東京へと広がり運動が加速した。米の暴騰に無為無策で、民衆の要求に応えることのなかった時の寺内内閣は崩壊し、「大正の米騒動」から7年後の1925（大正 15）年、加藤高明内閣の下、普通選挙法が成立した。このように、日本の近代において、新しい「大衆」の存在を確認することになるとともに民主主義が浸透する原動力になったことが2つ目の歴史的な意義といえる。

ロシア革命は、女性らの叫びから始まった革命とも呼ばれ、連合国側に立って第1次世界大戦で生活が苦しくなる一方で、女性労働者らの「パンを！」と求める街頭デモが革命の火付け役だった。イギリスやフランスでは、パン騰貴に対して、荷馬車を差し止めるか、またはその小麦が外国向けであろうと、不足している国内向けであろうと、他の港へ小麦を積み出す船を差し止めていた。アメリカ・ニューヨークでは、婦人労働者は同盟会を組織し、高価を貪る肉店に押し寄せ指定の安さで肉を売ることを強談し、その後は店頭のガラスを破壊したり、吊してあった牛豚を街頭へ投げ出したりした。このように生活に密着した騰貴では、日本も欧米も関係なく、女性が先頭を切って立ち上がることが世界共通のできごとと言える。これらの行為は、生活の最前線に立っていた女性が倫理・道徳によって、生きるための必需品を適正な価格で売るという「モラル・エコノミー（生存のための経済）」の概念に結びつくものと考えられる。これが、3つ目の歴史的な意義である。

【モラル・エコノミー】
ロシア：女子労働者がパンを求めて街頭デモ→ロシア革命
イギリス・フランス：他の港へ小麦を積み出す船を差し止め
アメリカ：婦人労働者は同盟会を組織し、指定の安さで肉を売ることを強談
日本：漁村の主婦が、米の移出阻止・廉売要求
生活の最前線に立っていた女性が倫理・道徳によって、生きるための必需品を適正な価格で売ることを要求（歴史的意義③）

米騒動に関するこれまでの先行実践では、加藤（2012）は、上記で示した「これまでの米騒動の概念図」をたどることに終始しており、社会認識を深めることも市民的資質を高めることもできない。また、竹中（2008）は、社会的な見方・考え方のうち経済的な視点で米騒動を探究している。そして、政府の立場と民衆の立場で米騒動の対策について意見をもたせ、米騒動について判断させている。市民的資質は高まるように構成されているが、米騒動について内容がやはり「これまでの米騒動の概念図」でとどまっており、生徒の価値判断も偏らざるを得ないものになっている。そこで、本単元では、「新しい米騒動の概念図」に基づき「米騒動が起きる因果関係」、「米騒動の歴史的意義」、「モラル・エコノミー」の３つの概念を獲得させ、米騒動についての因果関係や歴史的意義をより深く社会認識させたい。そして、この社会認識を踏まえたうえで多角的・多面的に米騒動について生徒自身が価値判断することで、市民的資質の育成につなげていきたいと考えている。

（２）生徒の実態

地理・歴史的分野ともに、単元のはじめに「どのような」「どのように」といった課題をもとに基礎的・基本的な事実を確認する学習を行い、「なぜ」といった課題に対して、原因や仕組み、法則などの概念を獲得する学習を行っている。そして、単元の終わりに「どちらがよいか」や「最も

重要なのは何か、誰か」といった課題をもとに、価値判断する学習を行い、全体として社会について分かる（社会認識）という学習を行ってきている。価値判断する学習においては、討論の学習活動を取り入れてきた。その理由は、討論は根拠をもとに主張したり反論したりしながら議論が展開されることから、自分の意見との共通点や相違点について比較・分類・関連付けが可能であり、異なる視点や価値観に気付くことができるので、思考力・判断力・表現力を育成する効果が期待されるからである。

生徒はこれまでに、歴史的分野で「縄文人は、南アメリカ大陸に渡ったのだろうか」、「縄文時代と弥生時代、タイムスリップするならどちらがよいか」、地理的分野では「イギリスはＥＵを離脱して利益があるのだろうか」、「アマゾンはこのまま開発を続けてもよいのだろうか」、「東京大都市圏は、全国から多くの若者が移動してきているのに、なぜ　少子化が進むのだろうか」という課題で、様々な資料を読み取り、それを根拠にして合理的に判断をしてきており、市民的資質は少しずつ高まりつつある。しかし、市民的資質の育成には、社会認識が不可欠であるが、その社会認識である社会諸科学の研究成果を通して社会の仕組みを認識することが不十分であると感じている。不十分が故に経験知や感情を根拠にする場面があり合理的な判断と言えない場面があるからである。そこで、市民的資質をさらに育成していくために、歴史的分野で、富山県で起こった社会問題（ここでは米騒動）について、多面的・多角的な視点に立って、歴史的な見方・考え方を生かした探究的な学習により社会認識を深めることが重要であると考える。

３　教科の本質に迫る授業づくり

米騒動の意義や因果関係から民主主義の発端になったことを捉える上で、「社会的事象等の歴史的な見方・考え方」を意識した問いを設定したり、仮説吟味学習を取り入れて学習課題（問い）を工夫したりすることで社会認識が深まり、市民的資質がより育成される。

「米騒動」について「歴史的な見方・考え方」である「時期、推移などに着目して捉え、類似や差異などを明確にしたり、事象同士を因果関係などで関連付けたり」できるような「問い」を設定することで、社会科の本質に迫りたいと考える。

また、本校の研修主題は「主体性の高まりをめざす課題学習」であり、生徒が主体的に課題を解決していく学習が長年求められてきた。また、「学習指導要領の改訂の視点」における「どのように学ぶか」という観点では、「主体的・対話的で深い学びの視点からの不断の授業改善」が強調されている。その中で「問題発見・解決を念頭に置いた深い学びの過程が実現できているか」「自らの考えを広げ深める、対話的な学びの過程が実現できているか」ということも求められている。これらを満たし、社会認識を深め、市民的資質をより育成する学習方法として、本単元では、岡﨑誠司氏（富山大学）が提唱している「仮説吟味学習」を設定した。

「仮説吟味学習」とは、「子どもが教育内容に関わる自らの問題を設定するとともに，問題に対する根拠ある仮説を設定し，子ども自身が、その正当性・合理性を個人の側と社会の側の両面から吟味する過程を保障する学習」である。生徒は、学習対象が具体的で個別的な対象であってはじめて、仮説を設定することができる。ただし、その場合、生徒は個人の側から仮説を設定することとなり、教師の指導なく仮説を吟味しても常識的認識にとどまることとなる。そこで、まず第一にこの学習では、社会システムの側から仮説を吟味する過程を導入することによって、視点の転換を図ることをねらっている。

また、「仮説吟味学習」による授業づくりの第二のねらいは、生徒が地域の事象理解にとどまることなく、地域の特色を社会システムとして解釈し、より良いシステムを主体的創造的に考えることにある。「仮説吟味学習」による授業づくりでは、個人を超えた社会システムそのものを認識対象とし、生徒にシステムそのものを正しいものとして受容させるのではなく、なぜそのようなシステムとなっているのか構造の解明を行わせたり、そのシステムの背景や原因を探らせ、問題点を明らかにさせたりする。そこで、授業は、原則として「個人の側から仮説を設定する過程」と「社会システムの側から仮説を吟味する過程」と「仮説を修正・再設定する過程」の3段階構成となる。

本単元における構成論理は以下のようになると考える。「個人の側から仮説を設定する過程」では、「米騒動は、良いイメージの出来事ではないのに、なぜ観光の目玉にするのだろうか。」に対する仮説を設定する。「社会システムの側から仮説を吟味する過程」では、全国に先駆けて「生存権」である「生活保護」という基本的人権を尊重した政策を施していたこと、藩閥内閣を崩壊させ

普通選挙法が成立するなど民主主義が浸透する原動力になったことが歴史的な意義として明らかになる。「仮説を修正・再設定する過程」では、「米騒動は、良いイメージの出来事ではないのに、なぜ観光の目玉にするのだろうか。」という同じ問いに対して、再び仮説を設定する。その仮説が社会システムの内容をふまえ、魚津市の立場に立ったより客観的な内容の仮説に成長していれば、「社会的な見方・考え方」も成長していると言えるだろう。そして、「米騒動をどのように評価すればよいだろうか。」という問いで、米騒動について生徒自身で「社会的な見方・考え方」を生かして合理的に判断させていくことで、市民的資質の育成につなげていきたいと考えている。

４　単元の目標

○　時代背景に着目しながら、米騒動に関心を高めるとともに、課題解決に向けて意欲的に追究しようとしている。【社会的事象への関心・意欲・態度】

◎　米騒動の意義について、学習課題やそれを解決する仮説を立てることができる。【社会的な思考・判断・表現】

◎　米騒動の意義について合理的判断をすることができる。【社会的な思考・判断・表現】

○　米騒動に関する資料から、米騒動の因果関係や意義を読み取ることができる。【資料活用の技能】

○　米騒動の因果関係や意義や大正期に民主主義の意識が高まったことを理解している。【社会的事象についての知識・理解】

５　学習指導過程（全５時間）※下線：学習課題、二重下線：単元を貫く問い

過程	教師による発問・指示	期待される生徒の反応・獲得させたい知識概念
第１次 米騒動についての事実認識	１　米騒動はいつ起きたのだろうか。	・大正時代
	２　大正時代だけだろうか。　資料①	・明治時代にも起きている
	３　米騒動はどこで起きたのだろうか。　資料①	・水橋、滑川、魚津、泊、伏木などの富山県内をはじめ、全国１道３府３８県
	４　米騒動は、どのような人たちが中心だったのだろうか。　資料①	・漁村の主婦
	５　なぜ米騒動が起きたのだろうか。　資料②	・米が値上がりして、米を買って暮らす漁村の人たちに最も影響があり、買えなくなったから。
	６　なぜ米が値上がりしたのだろうか。（学習課題１）　資料③	・明治時代→ 1) 総人口の増加と都市人口の増加で米の消費量が増加し、米の供給量が不足したから。 2) 富山県は、北海道への移出米が多かったから。 ・大正時代→ シベリア出兵を見こして、米商人や地主などが米を買い占めたから。
	７　この富山県で起き全国に広がった米騒動について、あなたはどのように思いますか。	・貧しく生活が苦しく大変だったんだな。 ・女性が暴動をしてすごい。 ・このような暴動で富山県の名前が出て少し不名誉な感じがある。
第２次 学習課題の設定と個人の側からの	８　この資料から、疑問に思うことはないですか。	・米騒動は、あまり良いイメージがないのに、どうして観光の目玉にするのだろう。 ・米騒動は、何か重要な意義があるのだろうか。

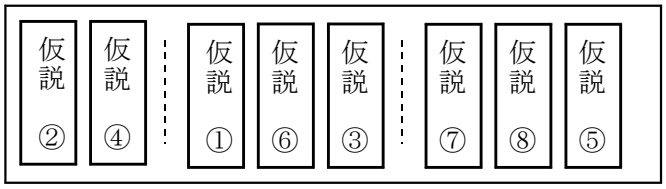
仮説設定 （本時）	9　疑問に思ったことを基に、学習課題を設定しよう。 10（例）米騒動は、富山県民である私たちにとって必ずしも良いイメージではないのに、なぜ魚津市役所の人たちは観光の目玉にするのだろうか。（学習課題２）	・米騒動は、良いイメージの出来事ではないのに、なぜ観光の目玉にするのだろうか。 ・仮説１：米騒動の意義が、見直されているのではないか ・仮説２：日本を変えた出来事として、評価されているのではないか。 ・仮説３：魚津市には他に観光の名所がないのではないか。 ・仮説４：女性の行動が評価されているのではないか。
第３次 社会の側からの仮説吟味 （本時）	（仮説１について） 11　なぜ魚津では、米騒動がおさまったのだろうか。　資料④ （仮説２について） 12　日本を変えた出来事として、どのようなことがありますか。　資料⑤ （仮説３について） 13　魚津市にはどのような観光資源があるだろうか。　資料⑥ （仮説４について） 14　偏見として誤解していることはないだろうか。　資料⑦	・国に生活保護制度ははなく、魚津は全国初となる貧民救助法を制定し、米の支給や安売りを行うなど福祉的対策が行われていたから。 ・県内のどの市町村も行政が救済策を講じていたから。（基本的人権の尊重） ・米騒動は、欧米と同じく不正な利益を得ようとする商人や権力に対して激しく立ち向かうモラルエコノミーである。 ・社会運動として全国に拡大し、藩閥内閣をたおすことになった。 ・普通選挙期成同盟が結成され、日本の普通選挙法成立に影響をもった。（民主主義の原点） ・蜃気楼、水族館、埋没林博物館、魚津城跡等 ・民主主義の原点に女性が立った。 ・漁師の主婦らの井戸端会議は、政治、経済、文化まで幅広く、ロシア革命が話題になることもあった。
第４次 仮説の修正・再設定、合理的判断	15（例）米騒動は、富山県民である私たちにとって良いイメージではないのに、なぜ魚津市役所の人たちは観光の目玉にするのだろうか。（学習課題３） 16　米騒動をどのように評価すればよいだろうか。（学習課題４）	・貧民救助制度を全国に先駆けて確立するなど生活保護という基本的人権を尊重することにつながっているからではないか。 ・民主主義の原点であると言え、観光の目玉にして、全国に広めるべきと思っているからではないか。 ・生活必需品の適正価格を求める行動は欧米も日本も同じであり、女性によるモラルエコノミーという行動であったということを伝えたいからではないか。

６　本時の学習（全２／４時間）

（１）指導目標

多くの富山県民の米騒動に対する負の認識と魚津市が米騒動を観光の目玉にしようとする資料内容との矛盾点から設定した学習課題に対して、課題解決に向かう仮説を立てられるようにする。

（２）展開

学習活動と予想される生徒の反応	指導上の留意点
1　前時までの内容を確認する。	・ＩＣＴを使用して、前時までの内容を振り返りやすくする。 ・米騒動についてのこれまでの負の認識を提示する。
2　資料を見る。 ・米騒動と言っても誰も変に思わなくなった。 ・市役所自らが米騒動を観光の目玉にしようとしている。	・ＩＣＴを使用して資料を提示する。
3　これまでの認識と資料内容の相違点について、疑問に思ったことをノートに書き発表する。 ・米騒動に何か大事な意義があるのではないか。 ・イメージが良くないのに、どうして観光の目玉にするのか。 ・米騒動の何を観光にするのか。	
4　課題を設定する。	
米騒動は、富山県民である私たちにとって必ずしも良いイメージではないのに、なぜ魚津市役所の人たちは観光の目玉にするのだろうか。	
5　学習課題の解決に対する仮説を付箋に書く。 ・仮説１：米騒動の意義が、見直されているのではないか。 ・仮説２：日本を変えた出来事として、評価されているのではないか。 ・仮説３：魚津市には他に観光の名所がないのではないか。 ・仮説４：女性の行動が評価されているのではないか。  	・付箋を用意する。 ・どのような仮説も認める。
6　仮説を発表し、仮説を書いた付箋を黒板に貼って同じ内容に分類しまとめる。	・黒板に付箋を貼り、分類の作業をしやすくする。 ・分類した付箋の内容から、仮説を決める。 ・分類された仮説の中から、１つにまとまらない場合は、教師の方で意図的に決める。
7　次時の予告 仮説を吟味していくことを告げる。	

（３）学習評価の視点

・　米騒動が富山県から全国へ暴動が拡大したという負の認識内容と魚津市が米騒動を観光の目玉にしようとする資料内容との矛盾点から設定した学習課題に対して、課題解決に向かう仮説を立てることができたか。　【社会的事象への思考・判断・表現】（発言やノート等）

７　授業観察の視点

・　資料から学習課題を設定する学習活動は、課題意識を高めることに効果的であったか。
・　仮説を立て分類する手立ては妥当だったか。
・　「学習課題」や「問い」は、思考を促すものであったか。

〔主な参考文献〕

【方法論】
・富山大学人間発達科学部附属中学校『主体性の高まりをめざしてー課題学習で学校をつくるー』富山大学出版会、2009 年
・岡﨑誠司『変動する社会の認識形成をめざす小学校社会科授業開発研究』風間書房、2009年
・岡﨑誠司『見方考え方を成長させる社会科授業の創造』風間書房、2013年

【内容論】
・竹中伸夫「見方・考え方の相対化を志向する歴史授業構成（１）－中学校歴史単元「大戦景気と米騒動」の場合－」就実大学・就実短期大学『就実論叢38号』2008年
・NPO法人米蔵の会編『魚津フォーラム　米騒動を知る』桂書房、2013年
・山内景樹『米がつくった明治国家』株式会社かんぽう、2004年
・井上三夫『水橋町（富山県）の米騒動』桂書房、2010年
・細川嘉六ふるさと研究会編『民が起つ　米騒動研究の先覚と泊の米騒動』能登印刷出版部、2013年
・細川嘉六ふるさと研究会編『米騒動とジャーナリズム　大正の米騒動から百年』梧桐書院、2016年
・北日本新聞「米騒動100年」2018年1月1日～1月12日
・魚津市教育委員会編『魚津の米騒動資料集』魚津市教育委員会社会教育課、1999年
・中田尚「米騒動に学ぶー発祥の地魚津発ー」『税経新報No.641』、2016年
・加藤好一『中学歴史の授業』民衆社、2012年